

「毒舌評論家」杉山平助の台湾論

張 家禎 (大阪大学大学院)

戦前、大勢の日本内地作家が台湾を訪ね、その後台湾と関わる作品を書いた。本稿が探究する杉山平助もその中の一人である。

杉山平助は岡山備前藩の藩士杉山岩三郎(中川氏のち杉山氏の養子になる)の庶子であり、母は杉山宇野である。1895年6月1日、大阪市に生まれた。翌年、生母が死去し、大阪の八百屋に養子に行った。1902年、上京し、慶応幼稚舎に入り、大学にまで進んだ。1912年に慶應義塾大学理財科予科に入ったが、翌年、肺結核にかかり中退して5年間の療養生活を送り、その間哲学書、文学書などを濫読した。1917年、『大阪朝日新聞』が行った懸賞文芸の選外佳作に入った。1925年、小説『一日本人』で生田長江に認められ、文芸評論などを書いた。1928年、『文芸春秋』の匿名短評「文芸春秋」欄を担当し、好評を得た。1931年、『東京朝日新聞』に氷川烈の筆名でコラム〈豆戦艦〉欄を執筆した。1937年の日中戦争勃発後、10月から12月まで中国に滞在し、戦地報告を書いた。1938年にこれらの作品をまとめ、『支那と支那人と日本』を出版し、9月から11月まで、内閣情報部漢口攻略戦に派遣したペン部隊の海軍班の一員として従軍した。1940年の5月、台湾と琉球へ旅をした。1941年、彼が支持する外相松岡洋右の失脚とともに、文壇から疎外された。翌年、代表作『文芸五十年史』を出版した。戦後、再び執筆したが、二年足らずして、1946年12月21日に死去した。

平助は生田長江に師事して小説を書くが成功せず、評論は歯に衣着せぬ文章で同時代の人々からは「毒舌評論家」として知られていた。彼が書いたコラムはジャーナリズムの注目を集めた。その庶民的立場からの辛辣な筆鋒と文学にとどまらず政治、社会、風俗批評にも及ぶ視野の広さは、十五年戦争初期の固く口を閉ざしたジャーナリズム界にあって貴重な存在であった。それから戦争の激化とともに、国家主義、軍国主義的傾向となった。

杉山平助は台湾関係作品―「台湾を論ず」(『改造』22巻12号、1940年7月)と「台湾の旅」(『改造』時局版8、1940年7月)二編を残している。今までの杉山平助研究には、彼が台湾へ行ったことはまったく言及されておらず、戦前の台湾文学を広く研究した尾崎秀樹もそれに触れていない。管見の限り、杉山平助と台湾についての研究はまだないのである。

研究方法として、本稿は両作に基づき、1940年の5月の新聞記事を補助線にし、杉山平助の台湾旅行とその論述を分析する。最後に筆者がこの両作を調査した時に出会ったエピソードを加える。